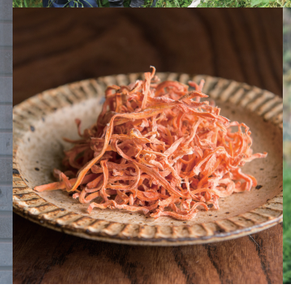
天歩 No.164
2019年7月



てんぽ印　乾燥工房 OPEN!

無茶々園ではすっかりおなじみとなった、てんぽ印の乾燥野菜・乾燥果物シリーズ。今夏、この製造を一括しておこなう「てんぽ印の乾燥工房」が新しく完成しました。

てんぽ印のメンバーは、Iターンで就職したスタッフを中心に9名と、ベトナムやフィリピンからの技能実習生4名。主な取り組みは有機農産物の生産ですが、畑を耕し、種苗の植え付けから収穫までの栽培はもちろん、収穫してからの加工、袋詰めまですべてを自分たちの手でおこなっています。また、無茶々園の農家が収穫した梅を梅干しにするのも、彼らの手仕事。みかん山にいたかと思えば野菜畑に、早朝には海辺の干し場、夕方には選果場…彼らのフットワークとチームワークには感服です。

ところで、てんぽ印が野菜などを育てている畑の多くは、愛媛県松山市北条（ほうじょう）という地域にあります。一方、これまで加工場として使っていた公共施設があるのは、西予市明浜町。収穫した農産物はその都度、自分たちのトラックで約3時間かけて運ぶ必要がありました。畑の近くに自分たちの加工場を持ちたい！と数年前から構想をあたため、ついに今年、それが実現。もちろん場所が近くなっただけではありません。施設には最新の機器が備えられ、国が定めた一般衛生管理プログラムにも対応。一層の生産性向上・生産力強化を図り、また今後の多様な商品の開発も見据えています。

めでたく完成した乾燥工房ですが、本当の本番はこれから。日々の農作業を進めながら、新体制での仕事を軌道に乗せるべく、毎日てんやわんやのてんぽ印ですが、明浜と北条の往復の合間を縫って、代表の村上が話をきかせてくれました。

てんぽ印の前身であるファーマーズユニオン天歩塾が加工事業に乗り出したのは、2011年のこと。豊作だった大根を余らせてしまうのを避けるため、明浜のちりめんを干す網を借り、天日干しの切り干し大根を作ったことがスタートでした。農作物の生産はどうしてもその年の作柄に左右され、特に豊作の年は、生のまま適期に全て出荷することが難しくなってしまいます。それを乾燥加工することで、廃棄ロスを減らし価格を安定させることはもちろん、あらゆる面でメリットが得られるようになりました。季節を問わず販売できること、便利さという付加価値でより多くのお客様に手に取っていただけること、そしてスタッフや外国人技能実習生の新たな仕事の幅が広がること。乾燥加工はもはや生産調整という役割を超え、てんぽ印の事業を支える大きな柱の一つとなりました。乾燥シリーズの品目も着実に増やし、現在10種類をこえるラインナップに。ゆくゆくは乾燥だけでなく、粉末や練り物など、様々な種類の加工に挑戦していきたいといいます。

新しい農業の可能性を切り拓く、てんぽ印。でもあくまで、大事にしたい原点は“地方・地域”というキーワード、そこでの“生業としての農業”だといいます。こつこつと単純で地道な作業の積み重ねに、急峻な斜面や夏の暑さとの闘い。どれだけ頑張っても、自然の脅威を前に為す術をなくす時もあります。それでも一つ一つのしごとが、嬉しい実りの季節につながっていく。そんなふうに繰り返す日々の暮らしの中で、脈々と受け継がれ、営まれてきた農業。この地でこれからも絶えることなく続いてほしいと願いますが、人口減少による人手不足は深刻です。農作業に限らず、過疎化が進めばインフラの維持すら難しくなり、地域存続の危機も免れません。元気で自立した地域であり続けるためには、外から人が入ってくる、帰ってくることが何より大切。てんぽ印は、そのために開かれた入り口でありたい、という思いがあります。「カギを握るのは“よそ者・若者・馬鹿者”。継承産業といわれる農業の世界で、何も知らない、何も持っていない我々だからこそ、“てんぽな（向こう見ずな）”ことでもやってみる。もちろん、受け継がれてきたものに敬意をもつことも忘れずに。そうしてしっかりと地域に根付き、地元の人たちと一緒になって、ここならではの豊かな暮らしを、つくっていきたいのです。」

新規就農から始まり、農業生産の安定、そして発展へ。てんぽ印は今や無茶々園のなかで大きな生産力、地域の農業の担い手となっています。組織の成長とともに、村上の思いは一つずつ、形になりつつあります。さて、最後に話を戻し…乾燥加工を通して、てんぽ印から皆様に伝えたいことは？「有機農産物（オーガニック）が当たり前の暮らしが、地方にはあります。それを皆様にも、おすそ分けできたらいいなと。有機野菜･果物がいつでもそばにある、今よりもちょっとだけ、豊かな暮らし。てんぽ印の商品を通じて、皆様それぞれの形で見つけて、楽しんでもらえたら、嬉しいです。」

世界に誇る　狩浜の段々畑

この度、狩浜地区の段々畑を含む景観が国指定の重要文化的景観に指定されました。これを機に以前段々畑について連載していた明浜在住の里詩さんに改めて寄稿していただきました。

「この風景は人を幸せにする。」このひと言に私たちは迷いから覚めた。ここタカナデは狩浜の中でも段々畑はもとより、集落の佇まいやリアス式海岸の入江で織りなされる箱庭のような景観が一望できる視点場のひとつである。

今年の2月26日、狩浜の段々畑をはじめとする海・里・山の複合的景観を重要文化的景観とする国の選定（官報告示）を受けた。名称は「宇和海狩浜の段畑と農漁村景観」。全国64番目の選定地、愛媛県下では3箇所目、ミカンの産地では初めてだそうだ。ある人は、「集落にとっては2.26事件じゃの。」と真面目な顔で笑う。なるほど。これからの狩浜、いや、同じ段々畑のある愛媛県南予地方のミカン産地にとっても革命的な朗報であったかもしれない。

ふり返れば平成27年度から足かけ4年の綿密な地域調査は、住民が改めて足下（集落）を見つめなおし、郷土愛を確かめる機会にもなっていた。

選定の根拠となる300頁にわたる狩浜の調査報告書は自然、歴史・文化、生業など国内各地のエキスパートが、狩浜をつぶさに調べ上げたものだ。西予市は専属の担当者を配置し、国（文化庁）や愛媛県、調査の先生方と地元の間を見事に取りもってくれた。先生方やゼミの学生たち担当職員たちと地元の信頼関係は今もこの地にしっかりと根付いており、関わる形は様々だが、これらの出会いに感謝したい。

この風景を求めて当地を訪れる人たちも徐々に増えているが、地元にとっては相変わらず当たり前の風景である。地区の中でも篤農家の先駆け80歳も半ばになる好々爺はいう。「若い頃は都会に就職していく同級生がうらやましくてな、どうして俺だけここで百姓か！そう思うと無性に悔しくてのお。段々畑を見上げるたびに恨めしく思えたもんじゃが、今はこれが宝物に見えてくるから不思議なものよ。」

文化庁文化財第二課は「宇和海狩浜の段畑と農漁村景観」を、宇和海に南面する入江で漁業と農業を営み続けてきた狩浜に形成された景観地で、石灰石の石垣で何段にも築かれた段畑を際立たせながら、海、居住地、段畑、山林が壮大に連なる眺めを特徴とする。これは、黒潮の影響を受ける四国西南部のリアス式海岸における土地利用を示し、かつ、地形や地質に応じた斜面地農業の展開を伝える事例であり、我が国における生活及び生業の理解に欠くことのできないものとして貴重であると、選定の理由を述べている。

確かに集落にはハゼ倉や桑納屋をはじめ、養蚕が盛んな頃に建てられた家屋が数多く残っている。渇水に備えた無数に点在する畑の井戸や、生魚をクサラカシ（魚肥）にして蓄えた畑のノツボ（野坪）は農漁村ならではの風景であるし、100種を超える海の水棲生物からは、太平洋と瀬戸内海の潮が混じりあう宇和海の豊かさが実感できる。野山や石垣に生息する希少生物も含め、調査結果に驚くばかりだが、地元の精神的支柱である祭り等の伝統行事が、粛々と守り継がれていることなども選定を後押ししたと思われる。ぜひ一度調査報告書をご覧いただき「うみ・さと・やま」のつながりを確認されたい。

文化的景観の「景観」とは、先生のことばを借りれば「地域らしさ」だという。「狩浜らしさとは何か」「狩浜の文化的景観の本質的価値とは何か」のテーマは地元の皆さんと4年間を通じて論議してきたことだ。これからも狩浜らしさを失わないこと、きっとこの学びに終わりはない。

重要文化的景観の選定はゴールではない。集落の数ある地域づくりの素材の一つが増えたことでもある。これから保存計画や整備計画（策定準備中）に基づき、重要構成要素の保存や活用、また集落の景観を整えていく取組がはじまる。とかく変化の激しい世の中だが、住民の暮らしに負荷をかけず、変化をできるだけゆっくりしたものにしていく。私たちはそのスタートラインに立ったばかりだ。選定の言葉はこう語りかけてくる。

まずはこの地を識ることだ。この壮麗な風景は、有り余る石があっても、誰かが積み上げようと声をあげなければ、生まれなかった。それは到底一人でできるものではない。古くは親方と網子、檀家や氏子などで結ばれた『協働』の理念こそ集落の維持発展を支えた原動力のひとつだ。今を生きるあなた方は、先人たちが培ってきた「集落で心地よく生きる知恵や工夫」をひもときながら、ここで暮らす幸せについて考え、連綿とつながれた命の営みを次代につないでいきなさい。

> 農を生業（なりわい）する者は、傾斜地（さご）を開き、石を割り、積み上げた段畑を讃えよ / 漁を生業とする者は、千古不伐と守り続けた魚つきの林を子や孫に語り継げ / 商を生業とする者は、遙か日向（宮崎）まで縞を売り歩いた狩浜商人に倣（なら）え / 工を生業とする者は、山深く眠る大石積みを遺し、築港に請われた職人の技に学べ
> （かりとりもさくの会設立宣言「狩江人に告ぐ」から引用）

ここにはまもるものがあり、
まもりたいものがある。いざゆかん。

お届けするみかんは　勝ち残ったみかん

摘果作業を待つ伊予柑の幼果

記録的に花が咲くのが早かった昨年に比べると、今年の春は穏やかなスタートでした。ちょうど世間では 10 連休となっていたころに花の最盛期を迎え、いつもよりは少し早めくらいに落ち着きました。花が咲かなければ実も結びませんので、その年の収穫を占う最初の目立った指標が「開花」となります。

花が咲いた後にやってくるのは「生理落下」です。花びらが落ちると緑の子房が顔を出します。この小さな果実がぽろぽろと自然に落ちていくのが生理落下。みかんの樹が養分をどこに振り分けるのかがポイントになり、5 月から 6 月にかけて新芽と果実とで養分を競い合って果実が落ちるのが「一次落下」です。ちなみに新芽が自然に落ちることはありませんので、発芽が多いほど果実が落ちやすくなります。

もともとたくさん咲いた花を自然に調節する機能であり、よくできた生理現象です。ですが、この春はこの一次落果がかなり激しくなりました。一つは競合相手である春芽（新芽）がしっかりあったこと、もう一つはこの時期の天候です。乾燥したり温度が高かったりすると果実が落ちやすく、今年の気候はまさにぴったり当てはまってしまいました。特に春先からは降雨が少なく乾いた日が続き、普段は夏にしか利用しない潅水用のスプリンクラーを回した地区もあったほどです。

このあと 7 月にかけて進むのが「二次落下」。今度は残った果実同士や新根との養分の取り合いで、ここでも果実が自然に脱落していきます。こうして梅雨明けごろには果実の数が定まり、今年は豊作、今年は不作、とより明確になっていきます。いま 6 月半ばの段階では、今年の温州みかんの果実は去年よりも数がやや少ないように見えます。昨年はやや不作であった伊予柑やポンカンはまずまず着果しているようです。

そしてこれから収穫前にかけて、今度は生産者が「摘果」の作業を行っていきます。これは人為的に果実の数を調整する農作業。通常は生理落下を経てもまだまだ果実の数は多いものです。樹の負担を抑えて来年の花付きを確保するため、残った果実を太らせるため、品質を上げるために、適正な数になるまで手作業で果実を落としていきます。果実の止まりが多い年にはこの摘果作業に非常に多くの労力がかかり、逆に少ない場合にはほとんど手を入れなくても良いくらいとなります。

樹の生理的な働きに加えて、生産者の摘果作業も入り、最初の花数から比べると本当に少数の果実だけが収穫へと向かっていきます。みなさんのお手元に届く柑橘はどんな果実であれ、勝ち残った選りすぐりの精鋭、と言えるのかもしれませんね。

果梗（軸）ごと落ちる一次落下、
果実だけ落ちる二次落下

一か所にたくさん咲いた花も自然
と絞り込まれる

西日本豪雨から１年が経過して

無茶々園の明浜事務所から高山地区に向かう途中にも柑橘が根こそぎ流れてしまった畑があります。「ここの土を耕してからみかんを植えようと思ったけんど、山の上からの土砂は固くてよう耕せん。苗木を植えるところだけ掘ってなんとか植えれたわい。」と被災後の畑の上で語るのは、生産者の宇都宮亮尚（うつのみやすけなお)。西日本豪雨から1年経った今､状況をまとめてもらいました。

昨年７月７日の西日本豪雨災害から 1 年が経ちました。この一年で国道・県道や大きな河川、住宅の復旧は進みつつありますが、小さい河川や市道・農道の復旧はこれからです。

隣町の宇和島市吉田町のみかん畑の状況については、ニュースでご存知のかたも多いと思います。昨年の、西予市明浜町狩浜地区の状況についてですが、狩浜地区も川が氾濫して、たくさんの家が床下浸水しました。それで、豪雨災害のあとまず家の周りの片づけから始めました。

農作業を始めようにも、土砂崩れで農道 4 ヶ所が通れなくなっており、ここでも一苦労。土砂の量が３ヶ所共２トントラック２００台分ほどあり､撤去に１週間ほどかかりました。建設業者が主で、若手農業者や外国人研修生の手も借りて復旧にあたりました。そのうち１日は、地区住民全体で土砂の撤去作業に協力していただき、やっと農道が通れるように。

そしてみかん園地ですが、狩浜産地のシンボルでもあります石灰岩で作った「白い石段｣。かつての時代に、先人の作り上げた「白い石段畑」のすごさを改めて感じました。

うちの畑も崩れたのは、石垣のない斜面の畑で、２５年育てた極早生みかん「日南１号」の木約４０本が､土砂とともに流れました。今年３月に、温州みかん「南柑２０号」の苗木１７０本をその園地に植えました。表面の土が流れたところに植えた経験がないので、みかんの樹の生命力を信じて見守っています。皆様も産地の復活を応援してください。　　宇都宮亮尚

亮尚さんの土砂が流れた畑には温州みかんの苗木が植えらています。「これからきちんと育つのかは分からんが、みかんを信じて世話していくだけよ」と苦労の中にも期待の心が垣間見えました。この畑の温州みかんがたわわに実をならすのは数年後。畑の復旧への道のりはまだまだ長くも、一歩ずつ確実に進んでいます。

上：植えた苗木の前で。
左：豪雨から１か月　右：１年が過ぎモノラックの修理も進んだ。

天歩 5 月号でご案内した伊藤水産・伊藤さんの自宅の片付けも始まり、自宅の解体時期も決まりそうとの連絡がありました。伊藤さんも復興へ向けて進んでいます。こちらも変わらぬ応援お願いいたします。

生産者紹介　大塚勇太さん

今年度から正式に無茶々園生産者となった大塚勇太（おおつかゆうた）さん（36 歳)。明浜町高山出身で、以前は東京で TV 関係の仕事をしていましたが、2 年前に愛媛へ U ターン。実家は農家ではなく、地元出身ながら「新規就農者」です。当初は農業をしようとは考えていませんでした。たまたま知り合いのみかん農家に頼まれて手伝っているうちに「楽しいし、体調も良いな」と農業への関心が高まっていったそうです。地元の人たちは、いろいろ助言してくれたり、農業をはじめるとなれば道具を譲ってくれたりと、後継者の少ない中での若者の帰郷を喜び世話をしてくれました。

正直なところ「無茶々園」が何なのか以前はほとんど知らず、同級生が無茶々園に加入しているときいて「お茶の仕事？」と思ったとか。農業といえば、農薬を使って作物を栽培するのが当たり前と思い込んでいましたが、一から始める場合農薬代などのコストの問題や、一度慣行農法にしてしまうと農薬を減らすのは大変なのではないかと考えるようになり、無茶々園加入に至りました。何か所か園地を借り、現在作っているのは合計一町歩（約１ヘクタール）ほど。一人での作業ですがじゅうぶんやっていけます。ただ、一人で困るのは、わからないことがあった時にその場で尋ねる相手がいないこと。もちろん後で近所の農家に質問をするのですが、現場の状況をみないとわからないことも多く、これが農業後継者なら親や祖父母と一緒に作業しながらその都度尋ねることができます。「授業料を払ってもよいから、定期的にベテラン農家に指導に来てもらいたいくらいです。」と、勉強熱心で非常にたのもしく感じます。

地域の後継者としても、新規就農者としても、これからが楽しみです。大塚さんのように農業をはじめる人が後に続くと良いですね。

シトラスが育てる　国産 / 原木 / きくらげ

組み積まれた原木に生えるきくらげは、こげちゃ色とも違う深い色合いで、一枚一枚がのびやかに育ち、まるで花弁のように重なりあっています。さわると柔らかく、少ししっとりとしていて普段目にする乾燥して小さくなったきくらげとは異なる姿です。

無茶々園のきくらげはジューシーフルーツやレモンを育てている山下さん、畑野さんらのグループ「シトラス」が栽培しています。農閑期にも栽培できるものを求め、様々なキノコ類を実験的に育てていましたが、その中でも雨の管理をすれば順調に育つこと、そして原木として使う樹が周辺の山で手に入ることから本格的にきくらげ栽培に着手しました。

国内できくらげの栽培に関する情報が少なく、日々実験の繰り返し。それでも「きちんと水を管理することができればきくらげは大きくなってくれる」と苦労もみじんも感じさせない、なんとも嬉しそうに眼を細めて語る山下さん。この様子だけで成功の理由が伝わってくるようでした。

そしてもう一つ、ぜひ皆さんにお伝えしたいことがあります。きくらげの畑のそばには大きな白い袋が多数並んでいました。これらには役目を終えた原木を入れ、肥料として山に戻すことができるようになるまで保管しています。何よりもいい肥料になると話す山下さん、畑野さん。朽ちた樹がまた新しい樹を育てる。シトラスの農業に対する考えを見せつけられる思いがしました。

今年のきくらげは順調に成長しています。無茶々園で販売しているカット干ししいたけも２人が中心となって育てたものです。併せてぜひよろしくお願いいたします。